

※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあつたのではないかと、気づきから使われはじめた言葉です。

協働での支援会議をきっかけに

令和5年度 重層的支援体制整備事業総括

線引きしない支え合いから “第四の縁” づくり

誰一人取り残さない地域共生社会の実現に向けて、包括的な支援体制づくりをめざすために、令和5年度は、下記図にある多機関協働事業と参加支援事業に重点を置きました。

具体的には、(重層的)支援会議を中心に庁内連携を活性化したこと、居場所づくりや参加支援に取り組む市民の地域活動を応援(第四の縁づくり)をしたことでした。

庁内連携の成果として、課題に向き合う支援会議でのケース検討から甲賀市の施策につなげるために、年々増加する身寄りなしのケースについて、福祉部局だけではなく、市民課や住宅建築課とも意見交換をし、ガイドラ

イン作成のための骨子を作ることができました。また、ハイリスクケア児を支えるためのこうか版ネウボウ会議を重層事業の支援会議に位置付けて、多職種の支援者がひとりでは抱えないような検討を行いました。前年度に比べて会議の回数やケース数も増えました。

しかしながら、(重層的)支援会議に挙がるケースは、氷山の一角にすぎず、孤立孤独、生活困窮など何らかの生きづらさを抱えている方はまだまだおられます。今後も、包括的な相談体制づくりと、関係者が線引きをしない支え合いや理解のもと、オール甲賀でニーズの掘り起こし、取り組みの深化、広がりをめざしていくことが令和6年度の目標です。

懐かしい未来新聞

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1350
0748-69-2155

本号の紙面
令和5年度 重層的支援体制整備事業総括
線引きしない支え合いから “第四の縁” づくり
地域共生社会推進課メンバー紹介
うまくいさすぎた重層物語 ファイナル3

① 包括的相談支援事業

相談や連携の意味を確認、共有

庁内連携会議 2回
社会福祉法人連携研修会 2回

世代や属性を超えた相談を受け止め必要な支援につなぐこれまで同様、連携し既存の制度で解決できるものは解決する

生活困難 ← 障がい ← 高齢 ← 子ども ← 健康

生活支援課、基幹相談支援センター、相談支援事業所、障がい福祉課、長寿福祉課、地域包括支援センター、子育て政策課、子育て支援センター、子育て支援課、子育て支援課、子育て支援課、子育て支援課

② アウトリーチ等 継続的支援

訪問・相談、支援の実行、モニタリング、終了

地域サロン・ボランティア支援 175回 家庭訪問・電話66回
他相談632回+α

支援者が孤立しないように、それぞれの立場で提案し、まちづくりにつなげる

③ 多機関協働事業

～ 支援会議により庁内連携を活性化～
前年度よりも検討件数増加、多問題・複合問題を検討

令和5年度開催実績 (令和4年度との比較)
検討回数：71回 (R4:53回)
ケース数：34ケース (R4:31ケース)
※ケース数は、R3年度からの累積数

庁内関係機関：34機関 (R4:24機関)
外部関係機関：38機関 (R4:35機関)が参加

すぐには解決できない、継続的な伴走支援が必要

④ 参加支援事業

プラットフォームKoka

R5.11.25に地域共生フォーラムを開催。開催にはひきこもり当事者グループや不登校の親の会などの方にも実行委員として参画いただきました。当日の講演では「不登校・ひきこもりって何？」と題して山下耕平氏の講演会を開催、100名の方々が集い、交流の場を持ちました。

社会とのつながりをつくるための支援
見守り等居住支援 居場所づくり 就労支援

ひきこもり支援ネットワーク会議
ひきこもり支援団体の3法人と、当事者グループでのネットワーク会議を立ち上げ3回の会議を開催しました。今後は商工労政や市民活動関係課と一緒につなぎ役、受け皿の資源開発、活用が課題となります。

他、市民がつくる主体的なグループの伴走支援や立ち上げ支援を80回以上実施しました。

⑤ 地域づくり

孤立を防ぎ、誰もが活躍できる場づくり・地域づくりに向けた支援

- 生活支援体制整備事業
- 地域介護予防活動支援事業【長寿福祉課】
- 地域活動支援センター事業【障がい福祉課】
- 地域子育て支援拠点事業【子育て政策課】
- 生活困難者のための地域づくり事業【生活支援課】

相談・連絡・情報提供

- ・地域住民
- ・民生委員、児童委員
- ・支援関係機関
- ・他分野の連携機関
- ・各種会議からの情報

多くの窓口からの相談

困りごとを抱えたまま孤立している人がいない状態をめざす

R5年度 新規でエントリーされた相談内容の属性

- 個別ケースだけではなく、身寄りなし問題、居場所の創設検討、若者の居場所などの地域課題を検討する場でもあった
- ・分野を横断した複合的な課題 9件
- ・分野や制度のすき間の困りごと 14件
- ・届かぬSOSに手を伸ばす必要がある相談 6件
- ・参加のカタチを探る必要がある相談 5件
- ・すでにある仕組みで何とかなる相談 5件
- ・その他の相談 2件

R5年度 新規でエントリーされた相談内容の属性

孤立を防ぎ、誰もが活躍できる場づくり・地域づくりに向けた支援

- 生活支援体制整備事業
- 地域介護予防活動支援事業【長寿福祉課】
- 地域活動支援センター事業【障がい福祉課】
- 地域子育て支援拠点事業【子育て政策課】
- 生活困難者のための地域づくり事業【生活支援課】

地域共生社会推進課メンバー紹介



臨時給付金対策室



地域共生社会推進係



福祉総務係

- 地域共生社会推進係：重層的支援体制整備事業、100歳大学、地域福祉計画作成、避難行動支援業務、成年後見制度事務
- 福祉総務係：民生委員児童委員業務、日赤奉仕団支援、義援金業務、社会福祉法人指導監査業務、戦傷病者関係、福祉バス受付業務
- 臨時給付金対策室：申請受付、相談、支給事務、支給対象者資格調査業務

小さな一歩が支援者の励みに

うまくいかないことがほとんど。でも時々嬉しいこともあるんです。

○ケース支援

・難病で定期的に中学校に行くことが難しく、社会とのつながりが持てなかった女の子の参加支援として、その子の描いたイラストを支援冊子「ひととなり」(ひきこもり状態にある人と家族の応援ブック)の表紙と本ページに掲載しました。また、地域共生フォーラム(プラットフォームkoka2023)でも本人の絵を展示し、その日は家族と一緒に本人も来場し、自信を深めるきっかけとなりました。「ひととなり」作成時と地域共生フォーラムの絵の展示のため、一緒に絵を選定するなど、本人と何回も面談を重ねました。



○「くらぶとかふえ」開催

・興味・関心でつながるための場づくりとして、令和6年3月3日(日)に自由に絵を描ける場としてS地区で「くらぶとかふえ」を開催しました。同世代の子同士をつながられるよう、それぞれの子と家族に働きかけました。あいにくもう一人の子がその日は来られなかったため、その目論見は実現しなかったものの、参加した子が家以外の場所で、姉妹で自分の好きなことを存分に出来たことを喜んでおられました。



うまくいきすぎた重層物語 Final-3

きりよく終わることができなかった、「薄い月明かり」。年度をまたぎ、所属を越えてお届けします。地域共生社会を理解する助けになれば幸いです。

【前回までのあらすじ】

地域市民センターの窓口で出会った河本と間島。住み込みの職を求めて甲賀市にやってきた間島は何やら生きづらさを抱えている。そんな間島を他人事として片付けられない河本は、あれこれと思いを巡らせる。

場のなりゆきで、夜空旅人（天体観望会）に間島を誘ってはみたが、二人の「のぞむ」は、新しい景色をみることができようか。

「雨なのに、星が見えるの？」
出掛けに、息子が不思議そうに聞いてきた。
車のワイパーは速いテンポで音を刻み、タイヤが水をたまりを蹴散らして振動を伝える。駐車場に着くと、正面玄関のポーチ照明がぼつんと見えた。まるで夜の海に浮かぶマリリンランプのように、ひとりぼっちの影をぎゅぎゅと照らしていた。
（間島が来る）

河本は急いで車を降り、傘も差さずに正面玄関まで走った。遅れて着く身だ、雨に濡れている方が都合いい。つまらない算段が頭をよぎる。

間島はパーカーのフードをかぶり、その上にも黒いダウンをはおって待っていた。

「今日は残念です。これだけ降ってれば諦めるより他ありません」

濡れた髪をワザとらしくかき上げて、河本は言った。

深くフードをかぶった間島は、太く丸い柱にもたれかかったまま黙っている。

「間島さんが待つていたら悪いと思ひまして。念のため来てよかったです」

もう一度、髪をかき上げて言った。

「中止じゃなかったら遅刻ですね」と、間島はつつむいたまま言った。

河本の濡れた顔から、汗のようにしずくが落ちた。

「そういえば、いつ、引越すのですか？」

引越すのを急かすような聞き方になった。

「あした引越します」、間島はいつもの調子で言った。

沈黙が気にならぬほど、ポーチの屋根を雨が強く叩き、それが跳ね返って、蒸気のようなしずきをあげる。

「どうしようも無いなあ」

河本は、雨首でごまかすように言った。

しばらくすると、一台のワンボックスがゆつくりとポーチの中に入ってきた。停車した運転席から40代後半くらいの女性が降りてきて、さっと二人に会釈をしながら車の後ろに回る。バックドアを開けて、リモコンを操作すると、荷台からリフトに乗ったストレッチャー型の車いすが下降してきた。地面に着くと、固定フックを解除し、車いすを雨の吹き込まないポーチ中央にまで移動させた。

「ほら、見てごらん。空は真つ暗で、こんな大雨でしよう、星は見えないね」

その女性は車いすを覗き込んで、うつすら見える天体望遠鏡を指さしながら、今夜の夜空旅人が中止であることと丁寧な言い聞かしている。

「ようやくひと段落といった具合に、二人の方を振り向いて言った。

「もしかして、お兄さんたちも夜空旅人のお客さん？」

「えっ、まあそうですね」

いまひとつの反感をした二人たちに、その女性は、自分たちのことを話し始めた。

ストレッチャー型の車いすに乗っている娘は、もうすぐ十六歳になる、あかり。普段は施設で生活する重症心身障がい児だ。幼い頃から母と夜空を眺める時間が一番のお気に入り。月に一度の夜空旅人を心待ちにしている。今晩は自宅で母と一緒に寝て、明日の昼過ぎに施設へ戻る。そんな暮らしがもうすぐ一年になるという「土砂降りなのにね、ここまで連れてこない」と納得しないの。まあ仕方ないか。この日のために施設で我慢して来たもんね」

「だから、もう機嫌直してね」、そう言っ母はあかりの頬をなでた。

その母の手を振り払うように、あかりは顎を突き出して首を振った。緊張した硬い身体が勢いよく揺れて、ストレッチャーがギシギシと鳴る。全身を突つぱり、苦しそうな呼吸をして、一カ月分の悔しさを訴えるように呻く。

河本はさっと歩み寄り、母の横に立って、あかりの肩を優しくさすった。数分をかけ、次第に身体は緩み、筋肉がほぐれ、顔に穏やかなさが戻ってくる。ポーチ照明に照らされたあかりは、色白で聡明な顔立ちをしていた。

あかりの視線は手かきを探るように動いて、河本の左肩と母の右肩の間をくぐりぬけて、ぴたりと止まった。河本が振り返った先には、何も出来ずに呆然と立ち尽くすひとりの男がいた。

（見つけた）というように、あかりの顔がふわつと、ほころぶ。それを見た母親は驚いたように、「この笑顔、久しぶりに見た」と言った。

河本は間島に手招きをして、母の隣を譲った。

いかにも不器用な間島らしく、身体に触れることもせず、車いすのひじ掛けに遠慮がちに手をのせて、しばしの沈黙の後で、こう言った。

「・・・次はきつと、晴れるからね。僕は、来月もここに来るから」

ただ願うことしか残されていないような言い方だった。

母は「ありがと」と礼を言っ、間島の肩を叩きながら、「次も来るんだってら、お名前聞いとかない」と言った。

間島は、二人の名前がおなじで、その名前を一緒にすると「希望」になると話した。

「すごいね。じゃあ、次は希望がもてる。絶対晴れるわね」

母は高らかに宣言してみせた。

間島は、ちらりとあかりの方に目をやっ、きまりが悪そうな顔で、ひじ掛けに置いた指をもじもじとさせている。

「いいじゃない。雨だったら、ここに謝りに来てくれるでしょう」

そう言った母の横顔には、笑い皺が深く刻まれていた。

（晴れでも、雨でも、ここに来たらいいよ）

あかりはそんな顔をして、やさしく間島を照らしていた。

母とあかりが帰っていった後、まるでお花見が終わったみたいになんか静かになった。

河本は、急に肌寒さをおぼえて肩をすぼめた。

「河本さん、風呂でも行きませんか」

らしからぬ気の利いた誘いを受け、そういえば、すぐ隣にいる間島が臭くないことに気がついた。どうしたんだろうかと河本が考えている時に、間島がその訳を教えられた。

「実はこの前、男の人に怒られたんです。このままじゃ次の仕事もダメになるぞって。そして、そのまま銭湯に連れて行かれて、余った回数券までもらっちゃって」

（義援金の男だ）

「確かここに券を入れたんですが」

間島はカバンを抱えながら、身体を小さく丸めてゴソゴソとやっている。

そんな間島を見ているうちに、味わったことのない豊かな気持ちが入り込んでくる。

「あわせたなあ」

河本は湯につかる前に、口に出した。

（作・中井 浩喜）